

柳 宗悦の民芸論 (XXIV)

－民具・民芸・手芸－

八 田 善 穂

目 次

- (1) 「「ざぜち」のこと」
- (2) 早川孝太郎と澁澤敬三
- (3) 『雪國の蓑』
- (4) 「蓑について」
- (5) 民芸と手芸
- (6) 手芸の世界

柳は¹⁾『『工藝』²⁾ 第84号³⁾に「「ざぜち」のこと」⁴⁾という文章を発表している。「ざぜち」とは愛知県北設楽郡の村々で正月に行われる「花祭」の際注連縄に貼られる切絵である。柳によれば、彼がこれを知ったのは澁澤敬三⁵⁾の「アチック・ミュージアム」⁶⁾においてであるという。⁷⁾ 本稿は、この柳と澁澤の接触を通して、民具と民芸の親近性を明らかにし、さらに蓑に関する文章を通じて民芸と手芸の関連をとらえようとするものである。⁸⁾

注

- 1) 柳宗悦 (1889 (明治22) - 1961 (昭和36))。
- 2) 日本民藝協会発行
- 3) 昭和13年2月15日刊
- 4) 筑摩書房版全集 (以下「全集」と略記する) 第11巻「手仕事の日本」(以下「第11巻」と略記する) 所収。
- 5) 1896 (明治29) - (1963 (昭和38))。実業家澁澤榮一 (1840 (天保11) - 1931 (昭和6)) の孫。日銀総裁 (昭和19)、蔵相 (昭和20)、国際電通社長、I O C 国内委員会議長、文化放送会長などを歴任。
- 6) 澁澤は学生時代から友人とともに、東京・三田の自宅の物置小屋の2階に、植物、動

(1) 「「ざぜち」のこと」

柳はいう。

「私達がこの「ざぜち」を始めて知ったのは、澁澤敬三氏等が企画されてある「アチックミュージアム」を訪問した時である。興味深い色々の蒐集品を見せられた時、中に一冊の画帖を出された。表紙には「花祭ざぜち」と記してあった。中を開けた時、吾々は異口同音に感嘆の声を思はずも上げた。それは思ひもよらぬ素敵なお相であった。吾々は五十枚近く貼られたそれ等の切絵をむさばるやうに繰つた。こんなものが日本にまだ活き残ってゐるのかと驚嘆せざるを得なかつた。……

それがどう云ふ性質のものか、何もかも澁澤氏等から教へられた。それが三州北設楽郡の村々で正月行はれる「花祭」と呼ぶ祭の時舞土に設けられる注連縄に貼られる切絵なのを知つた。此の花祭に付ては既に早川孝太郎⁹⁾氏の二冊からなる大著¹⁰⁾があつて、其の挿絵の一頁に既に紹介されてゐる所である。¹¹⁾

柳達はこの「ざぜち」の魅力にひかれて、昭和13年の正月に「花祭」を見学した。

「是は全く「アチック・ミュージアム」の諸氏の好誼によるものであつて、民俗学会の会員達の仲間に加はつて、幸にも花祭を見る機会が与へられたのである。¹²⁾」

『工藝』第84号には、次の16種類20枚の挿絵が掲載されている。

物、鉱物、化石などの標本を展示し、「アチック・ミュージアム」(Attic Museum、屋根裏博物館)と称していた。拙稿「柳宗悦の民芸論(V) — 民具と民芸 —」(『徳山大学論叢第28号』1987所収)および「柳宗悦の民芸論(XI) — 民具研究の方法 —」(『徳山大学論叢第34号』1990所収)(徳山大学研究叢書25『柳宗悦研究 — 民芸の美学 —』(平成14年)第九章および第十章)参照。

7) 年譜(全集第22巻下)によれば、柳がアチック・ミュージアムを訪問したのは昭和11年12月のことである。

8) 柳の著作は旧字体(正字体)、旧かなづかいによっているが、本稿では漢字のみ常用漢字に改めた(固有名詞、著作標題等を除く)。

9) 1889(明治22) - 1956(昭和31)。

10) 『花祭』(上・下) 岡書院、昭和5年刊。

11) 全集第11巻、P.424。

12) 同書、P.425。

鳥居に灯籠、鳥居に竹、神社に鳥居、神社に灯籠、二見浦、神主と巫女、曾我、稲に宝珠、神馬、桜に駒、笹に駒、楓に鹿、葦に小鳥、鶏、燕、五大尊
そして同号の編輯後記では次のように述べられている。

「此の号の挿絵に用ゐられた「ざぜち」は凡て「アチツク・ミュージアム」所蔵品から撮影を得たのであつて、澁澤敬三氏始め同館の方々に色々御厄介をかけたことをこゝに深く感謝したい。

又本年正月「花祭」の際、御世話になつた原田清、夏目一平、村上清文氏等にこゝで深く御礼の心を述べたい。……原田、夏目両氏からは民藝館の為「ざぜち」数種を贈られた。こゝに改めて感謝の意を表したい。¹³⁾」

「「花祭」のことは早川孝太郎氏が其の権威であつて、同氏の研究より詳しいものはない。それで同氏にお希ひし、「ざぜち」に関し寄稿を得たく切望したが遂に間に合はなかつたのは残念であつた。併し勝手ではあるが同氏の大著から「ざぜち」に関する一部を抜粋し又同氏の書簡を引用し吾々の希望の幾分を充たさせてもらつた。¹⁴⁾」

「花祭」からの抜粋および書簡は次の通りである。

早川孝太郎氏著「花祭」（前巻五十七—八頁）

「「ざぜち」白紙半紙に絵型を切抜いたものである。之は神座と舞戸に限つて用ふるので、四方の注連縄に貼る場合もあり、又直接鴨居に貼ることもある。

「ざぜち」の型は土地に拠りそれぞれ技巧が異つて居るが通常六種とし、七種又は八種の場合もある。而して之には型に拠り順位がある。仮に振草系古戸の場合で言ふと総て七種で、第一が駒形、次いで燈籠、鳥居、弥宜座女、社、日光、月光、五大尊で、之を四方の一辺に一組づゝ左を基準に貼るのである。六種の場合は鳥居又は五大尊が欠けてゐる。又土地に拠ると、燕を現はしたものの、祭典等の文字もあり、更に鹿、鶴せきれい、鶺鴒など変つたものもある。「ざぜち」は土地毎に原型があり、それに基いて截るのであるが、土地毎に技巧に特色があり、精巧驚くべきものを用ふる一方には、稚拙愛すべきものがある。単に之

13) 全集第20巻「編輯録」、P.401。

14) 同書、PP.401 - 402。

だけに就て比較を試みても興味は深い。¹⁵⁾」

同氏よりの手紙の一節

「(前略)「花祭の舞土を飾るザゼチ(蛇舌)御目にとまり候こと光榮に存じ候。あれにつき日本名はなきかと久しく注意いたし居り候が、これと思ふもの無之候。先年長野県下伊那郡の山村にて(向方)^{ムカガト}同系と思ふものを祭事に用ひ、矢張り祭場を神聖化するものに候が、之は三河花祭のザゼチに比べ遙かに技術的には劣つた感(少しく妙な申様なれ共)いたし候が、クモキリと申居候。何か思ひ当るやうに感じ候。その後九州に参り宮崎県椎葉村大河内(熊本との県界市房山の麓)にて一層込入りしものを見申候が、これをマヘクモと申居候。最も之は多分に天蓋に近き感もいたし候。」(後略)¹⁶⁾」

柳はいう。

「今日日本に「ざぜち」を刻める人間が残つてゐるとは不思議である。それも一人や二人ではなく又一村に限つた品ではない。北設楽地方の産物なのであるから感嘆に価する。併しこんな異常な力がいつ迄続くものか、出来た多くのものを見ると、生气に欠け始めたものがあちらこちらに見え始めた。……¹⁷⁾」

しかし「ざぜち」の美しさは古い美しさという意味ではない。また古い姿だから美しいということでもない。その美しさは人間が元来持っているべき美しさであり、美しさとして本質的なものを含んでいる。すなわち時代を越えて尊ばれていい要素を現している。もともと、形に新旧はあっても美しさそれ自身に新旧はない。「ざぜち」は古いから美しいのでもなく、新しくないから美しくないのでもない。それは人間が本来所有する尊い能力の現れとして感嘆すべきものである。昔の人たちは周囲や時代の影響で、この人間本来の能力を損うことなく易々と自然に現すことができた。しかし現代ではそれが非常に困難になってきた。よほどの天才でもなければその失われた能力を取り戻して働かす

15) 全集第11巻、P.431。

16) 同書、PP.431 - 432。

17) 同書、P.430。

ことができない。だから普通の人たちが今も「ざぜち」を産める力を保っていることが奇蹟に近いことになる¹⁸⁾。

「天才ならずして、天才の仕事に比べ得るものを、楽々と無造作に作る所に吾々の驚きが集まるのである。さうして実際はかくも無造作に自然に造れるやうな事情に入らずば、真に美しいものが沢山作られることはあり得ないのだと云ふ真理を教はるのである。¹⁹⁾」

（2）早川孝太郎と澁澤敬三

早川は愛知県下の農家の出身であるが、農業を嫌って上京し、絵画の修業に努めた。柳田國男²⁰⁾らにより創刊された雑誌『郷土研究²¹⁾』に、早川は「三州長篠より」と題する原稿を投書し、第2巻12号²²⁾に掲載された。これが機縁となって早川は柳田の指導を受けるようになる。この頃柳田は民俗採集者としての早川の能力を高く評価したようである（但し後に両者の関係は薄れていく）。

大正15年正月、早川は柳田を通じて親しくなった折口信夫²³⁾と共に、長野県下伊那郡あさげ旦開村（現阿南町）の雪祭と、愛知県北設楽郡豊根村（現東栄町）の花祭を見学した。そして帰京後、早川は柳田の紹介で、前年ロンドン勤務から戻った澁澤に会う。このとき彼は澁澤に花祭の印象を述べ、近くその概要を発表するつもりであると話すと、澁澤は「それだけの祭を一部の概要の紹介だけにとどめるのは惜しい。この際徹底的に調査して完全な花祭のモノグラフィを完成させたらどうか。調査と出版の費用は私がもつから」と早川を激励した。そこでさらに調査をつづけ、昭和5年4月、上下2巻の大作『花祭』が岡書院から出版された。澁澤はその完成を祝い、北設楽からゆかりの人を招い

18) 同。

19) 同。

20) 1875（明治8年）－1962（昭和37）。

21) 大正2年3月創刊。

22) 大正4年2月刊。

23) 1887（明治20）－1953（昭和28）。

て、花祭を自邸で再現した。澁澤は早川の調査中、みずからも奥三河へ足を運ぶほど強い関心を示した。

このとき同時に澁澤は、村の家々に残る民具に注目し、これを蒐めて東京に持ち帰った。アチック・ミュージアムが民具の収集を開始したのはこれ以降のことである。昭和5年には早川を中心として『蒐集物目安²⁴⁾』が作成された。

昭和8年、早川は澁澤の勧めにより、九州帝国大学農学部農業経済研究室に勤務した。そして昭和11年には東京へ帰り、農村更生協会に就職する。昭和21年からは、全国農業会が経営する高等農事講習所の専任講師となり、農業研究に専念するようになる²⁵⁾。

現在、早川の著作は『早川孝太郎全集』(全12巻、別巻1)として未来社から刊行されており、『花祭』はその第一巻と第二巻に収められている。また、抄縮版が昭和33年に岩崎書店から民俗民芸双書の一冊として出版され、昭和41年には岩崎美術社から再版されている。この岩崎版『花祭』には、澁澤が「早川さんを偲ぶ」と題する以下のような序文を寄せている。

「私が早川さんに初めて御目にかかったのは、柳田先生の御紹介で、大正十五年の初頭であったと記憶する。中学時代から、ひそかに生物学に心をよせていたものの、ついにその道へは行けなかった私は、大正の初頭から経済史や民俗学に興味を持ったが、これには穂積陳重・石黒忠篤²⁶⁾・柳田国男等の諸先生の学恩が大きかった。柳田先生には倫敦でもいろいろ教を受けたが、帰朝の翌春早川さんにめぐりあったのである。当時は未だ半分画伯で新興大和絵会に出品していたが、画題の多くは三河山村の風物であった。半分は民俗研究家であった。郷里の設楽、ことに北設楽郡内に二十カ所、他に三カ所、合計二十三カ所という広範囲にわたって行われている花祭の話を書くにつれ、その規模基盤の容易ならぬことに気づき、当時これが炬叢叢書の一冊として世に問うはずで

24) 拙稿「柳宗悦の民芸論(XI) — 民具研究の方法 —」(『徳山大学論叢第34号』1990所収)(徳山大学研究叢書25『柳宗悦研究 — 民芸の美学 —』(平成14年)第十章)参照。

25) 以上は三隅治雄『早川孝太郎』(日本民俗文化大系7)講談社、昭和53年刊による。

26) 1884(明治17) - 1960(昭和35)。

あったのを、変更して貰い、同君に徹底的に調査するようお勧めしたのであった。その内とうとう私も早川さんに連れられ、花祭見物のファンとなり、本郷なかんぜきの中在家を振り出しに、御園・足込・東藪目・古戸・上黒川等に数年間連続出掛け、終いには折口信夫教授、土屋喬雄教授や有賀喜左衛門²⁷⁾ 教授等の先輩学友、またはアティック同人多くを誘い出すほどになり、そのお陰で花祭の外にも北設楽中心に一円夏冬にかけて隈なくとってよい程歩きまわり、原田清・佐々木嘉一・夏目一平・窪田五郎・夏目義吉等同地方の人々との親しい交わりを結ぶに至り、本郷町在の振草川に臨む大崎屋の旧館等、今もってなつかしい想出の場となってしまった。また早川さんと相談して民具を蒐集し出したのもこの地方が最初である。

こんな機縁から早川さんの花祭研究の熱はますます上昇していった。生来持って生れた観察力・直観力・洞察力・綜合力を画家として錬磨された基盤の上に駆使され、それに加えて芸文上のすぐれた表現力（「猪鹿狸」²⁸⁾等は芥川龍之介²⁹⁾氏が、その方面でもすぐれたものとしていたく賞めていた）を発揮され、それにも増して、異常な心身上の精力と健康と兼備して全身を打ち込んだから、出来上って見て吃驚するほどの大作が具現したのであった。

天竜川の中程、交通不便な隠れ里にも、似た山村地方の民俗芸能が、かくもエキゾースティヴな形量で世に紹介されたのは、昭和五年の当時としては正に驚異に値し、わが国の民俗学にも至大の影響を与えたのはもっともな次第であった。

如上の関係から昭和五年この出版慶賀として、小宅改築を機に最も因縁の深かった中在家の花祭を東京に招致し、柳田・折口・石黒諸先輩を初め、多くの知友に見て頂き現地へ出難き方々にも真似事乍ら花祭を味って頂いたのであった。出席者の御一人泉鏡花³⁰⁾老はその後小説に花祭の光景を扱われた。（後略）
筆者は旧稿³¹⁾においても民具と民芸の近縁性を指摘したが、ここでとり上

27) 1897（明治30） - 1979（昭和54）。

28) 郷土研究社、大正15年刊。

29) 1892（明治25） - 1927（昭和2）。

30) 1873（明治6） - 1939（昭和14）。

げた「ざぜち」および花祭については、澁澤と柳が直接接しており、両者（民具と民芸）の親近性を最も良く示す例といえる。また柳の文章の中にも、「民具」の語は随所に使われている。このことから、両者が決して無縁のものではないことが確認できる。

平成13年3月から6月にかけて、大阪の国立民族学博物館において「大正昭和くらしの博物誌 民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム」という企画展が催され、その展示解説図録を兼ねて河出書房新社より『図説 大正昭和くらしの博物誌』が刊行された。ここに写真で掲載されている品々の中には、民芸館の蔵品としても通用すると思われるものが少なからず見られる。柳が目じたのは「ざぜち」であったが、これに止らず、柳は澁澤の活動に関心を払っていたのであろう。

(3) 『雪國の蓑』

昭和17年、工藝選書の第二篇として『雪國の蓑³²⁾』が刊行された。その中で柳は次のようにいう。

「編みに特に念を入れるのは襟廻りの部分である。秋田県では之を「じなし模様」と呼んでゐる。襟模様の義である。各地で材料を色々と凝る。多くは草を色系で編む。時には色系だけで模様に編む。併し材料の特別なのをを用ゐるのは、津軽地方の「織げら」と呼ばれるもの、即ち「伊達げら」の類である。襟廻りは白の紙縫りが主で是に黒糸を用ゐ、又時としては赤や緑や茶やその他色系を是に差してゆく。³³⁾」

その美しさは、形や材料や、色調などによることが多いが、とくに大切な要素は襟廻りの装飾的な編み方にある。この部分は決して装飾的付加物ではない。襟の部分はすれ易いため、丈夫にする必要があり、それには細かく編むのがよい。そこで編み方が考えられ、編み方から来る模様が生れた。それゆえ実

31) 注6) 参照。

32) 日本民藝協会「工藝」編輯室刊、全集第11巻所収。

33) 全集第11巻、PP.498 - 499。

用に発した装飾で、用と結ばれる美の良い実例がここに見られる。とくに「伊達げら」には編みに入念なものがあり、模様や色どりが優れている。編物に近い感じさえる³⁴⁾。

蓑は男も女も使用するが、「伊達げら」は男が女のためにとくに作るものである。仕事も細かく色も美しく、丹念に作る。町へ出る晴れ着として、どの女も大切に作る。これを作るには幾夜かを費し、材料も吟味するので安くはできない³⁵⁾。

「蓑は今も重要な民具の一つである。雨の時、雪の時、外に出る者、外で働く者に、なくてはならない民具である。こんなものがもう絶えて了つた都会に住めば、何か遠い時代の遠い世界の品物のやうに思はれはするが、併し歴史は猶も続いてゐる³⁶⁾。」

このような品物の一つの特徴は、ほとんどが自家用として作られ、商品ではないことである。材料を吟味し、時間をかけ、充分手を尽すのは、このような品物の特質であり、利益のために、とかく誠実さを欠く商品とは大きく異なる。もしこれが商品として作られるようになれば、ただちに不幸な変化をもたらすであろう。このようなものからわかることは、すべてのものが、自分が用いたいという気持から作られるならば、どれほど質が高まるかということである。商品を使って暮らす都会の生活と、自作品を多く使う農家の暮らしには、大きな違いがある。都会の人はこれで多くの便利を得るが、半面誠実な物と共に暮す機縁をしないで失ってしまった。

大部分の日本人はこれらの優れた民具の存在を知らない。どこにこんなものが存在するのかとさえ感じる。ましてこのような蓑が現在日本の農村で使われつつあることを知る者は少ない。これらは何も江戸時代のものではなく、明治時代の遺物でもない。昭和の今日も作り使われつつあるものである³⁷⁾。

人はこれらのものが、どれほど美しくとも、所詮荒々しい民具に過ぎないと

34) 同書、p.499。

35) 同書、P.500。

36) 同。

37) 同書、PP.508 - 509。

思うかもしれない。またこのようなもので日本を誇ることは、日本に文化から遅れた民族であるとの印象を与えるにすぎないと言ふかもしれない。しかし都市の浮薄な、材質の粗悪な風俗を思うと、どれほどの文化を誇ることができようか。蓑の類には未だかつて俗悪なものはなく、ひとつとして毒々しい色調や、弱々しい模様はない。そしてどんなものも不誠実さやごまかしの仕事ではない。つねに背後の伝統は深く、地方の性質が濃い³⁸⁾。

「吾々はこゝに一つの工芸品を正しいものにする様々な法則をさへ学ぶことが出来る。かう云ふ技術と美への確実な能力こそは、国民として最も育み、展ばすべきものであらう³⁹⁾。」

(4) 「蓑について」

昭和33年12月の『民藝⁴⁰⁾』第72号には「蓑について⁴¹⁾」があり、そこでは次のように述べられている。

「蓑や「ばんどり」(背中当)のやうな品々が、そのまま今日の都会人の日常生活に用ゐられないのは当然で、之は北國の特殊な風土や歴史や環境が求めるものであつて、各地で今も続いて作られてゐることを想うと、その土地では実際に今も必要な品々だといふことが分る。只都会人とは縁が切れてゐるといふに過ぎない。⁴²⁾」

多彩なものは主に娘のために母が作り、嫁入仕度の一つともなる。

このようなものは土地の生活を離れては用をなさないが、その形や色合いや模様の美しさは、都会の娘達が着ているコート等に比べ数段も美しい⁴³⁾。

「例へば今銀座通りを歩いてゐる女達の外套で、将来美術館に保存され陳列される運命の品が幾許あるであらうか。恐らく時代風俗の史料として以外に、

38) 同書、P.509。

39) 同。

40) 日本民藝協会発行。

41) 全集第11巻所収。

42) 全集第11巻、P.634。

43) 同書、P.635。

44) 同。

その美的価値の故に大切に保存されるものは一つもあるまい⁴⁴⁾。

母の娘に対する心尽しがあって、冬の長い時間をかけて仕事をするので、商品としての服地とは性格が全く異なる。

都会の人間にはもはや縁の薄い蓑であっても、ここに工芸品を美しくする多くの原理が見出される。仕事をする時の心の持ち方や、自然への態度や、色合いの調和の原理を、これらのものから学ぶことができる。どのような工芸品も、この蓑程の美しさに高まることは容易ではない。それゆえ現在の都会人の用からのみ批判して、これ等の値打を認めないのは、あさはかといわざるをえない⁴⁵⁾。

その美しさを見れば、都会人には無用だと見捨てるわけにはいかない。その荒々しさもどこか健康の徴であり、都会人の衣服の弱々しさとは性質が違う。その健康さについて、都会人はもっと反省してよい⁴⁶⁾。

「是等の蓑は粗野と云へば粗野だが、よく見ると都会人の着てあるものの方が、実はずっと粗末な不親切な品物だといふことが分る。荒々しいのは材料であるが、その拵へ方、扱ひ方はどこまでも懇切で、手抜きなどはしてをらぬ。之に比べると今日の都会人の服装には、利欲のために手抜きした跡がいたく目立つではないか。⁴⁷⁾」

たしかに今日では、もはや蓑が生活の中で使用されることはない。しかしそれらに施された丁寧な装飾は、今日もお私たちに新鮮で強烈な印象を与える。これほどのものが他に見当たらないのも事実である。

これらは自家製であり、男が女のために、母が娘のために作るものであるという。そうであるなら、これは民芸であると同時にまさしく手芸である。このように見れば、ここに民具 — 民芸 — 手芸というひとつのつながりをとらえることができよう。昭和17年に刊行された『工藝文化⁴⁸⁾』においては、中篇の一に「手工藝」という小見出が使われている。また昭和23年には『手仕事

45) 同書、PP.635 - 636。

46) 同書、P.637。

47) 同書、P.638。

48) 文藝春秋社刊、全集第9巻「工藝文化」（以下「第9巻」と略記する）所収。

の日本⁴⁹⁾』が刊行されている。これらの語も手芸と共通するところは大きい。

『工藝文化』の中で柳はいう。

「もともと工藝の歴史は実用工藝から起る。最初は凡て手工藝であつたのは言ふを俟たない。……

手工は自らが使うものを作ることから発した。人間は生活する為に、又生活を容易にする為に、幾許かの品物を揃えねばならない。原始の人達には幾つも要らなかったであらう。それも枝とか葉とか石とか、天然のものですませることが多かつたであらう。……それでも更に便宜にする為に、自然のものに幾許かの加工をすることが、早くも起つたに違ひない。住む為に、食べる為に、着る為に、さうして戦ふ為に、幾つかの品物を整へねばならなかったであらう。道具らしい道具もなく、自然の材料に頼つて簡単な手工を施したであらう。各々のものが好むまゝに自分の為に役立つものを拵へ出したのである。⁵⁰⁾」

しかし時間の経過と共に生活は複雑になり、手細工の数はそれと共に増加した。人類はこうして次第にもものを作ることの経験を重ね、品目の量は文化の程度を反映した。このように自給自足から工芸の歴史は出発した。しかし古い時代のこの事情は今でも絶えたわけではなく、原始の姿を続ける民族はまだ多い。文化の進んだ国々でも、自分の為に自分で品物を作る者は多い。都会から離れた地方では、農民達は余暇を見つけては手仕事に励む。自分のためだけではなく、一家のためにいろいろと作る。彼らは作り方を親から教わっている。身近には材料があり、経済的に、必要なものが簡単に買えるわけではない。売っていない品も多く、彼らは自分でそれらを作らねばならない。自分が生産者であり、消費者である。彼らには売るものを作る意識はない。

しかもものを作ることはそれほど容易ではない。うまく作るためには技術が必要であり、熟練が要る。しかも必要な品物の種類は多く、皆が一様に時間をもっているわけではない。また誰もがさまざまなものを作る技をもちうるわけでもない。さらに器用な者と不器用な者がいる。そこで次第に技の優れた者

49) 靖文社刊、全集第11巻所収。

50) 全集第9巻、PP.381 - 382。

に作ってもらうことになり、上手な者が人に代って数多く作るようになる。素人であった作り手が玄人に移っていき、玄人でなければできないものがいろいろ生れた。仕事はこうして次第に専門化された。⁵¹⁾

ここに述べられている前半の部分、すなわち各人がそれぞれ自分の使用のためにものを作る段階は、まさしく手工芸（手芸）と呼べよう。今日「手芸」の語は専ら趣味的な意味で使われ、主に繊維製品を指す。しかし本来は、より生活に密着したものとして、身の品々にかかわる作業の全体と考えて良いのではないか。

「民芸」の語には、多少なりとも産業化されたイメージが伴う。これに対して今日も手芸は販売を主目的とせず、純粋に個人的なものである。ときに手芸品が販売されることがあっても、それはごく小規模に止まる。バザー、フリーマーケット、「道の駅」などで手芸品が販売されるのはこの例である。昭和初期に柳たちは全国の荒物屋で品物を「発掘」した。しかし現在荒物屋はほとんど存在せず、売られている品はことごとく工業製品である。このような今日の下況で民芸の新しい道を求めようとすれば、手芸に着目すべきではないか。この観点からすれば、ここに民芸の原点として手芸（手工芸）を位置づけることができる。

（5）民芸と手芸

「民芸の原点としての手芸」ということは津軽地方の「こぎん（刺子）」について確認することができる。柳はいう。

「閉ざされた冬籠りには運命の悲しさがあつたであらう。だが「こぎん」に呪ひはない。作ることの喜びにこゝで逢える。呪ひであつたなら此の仕事はない。之が作れ、ばこそ人並の女である。娘としての、嫁としての誇りさへそこに見えるではないか。競ふていゝものをといそしむである。さもなくばこんな誠実な仕事はない。倦怠な此の仕事に凡ての倦怠を忘れてゐる。女達は作るこ

51) 同書。P.382。

とを愛したのである。愛さないやうなものは、男からも愛を受けなかつたであらう。娘のよしあしは「こぎん」に映る。母は手にとつてそれを幼い吾が子に教へた。⁵²⁾」

「好んで女達も男達もそれを纏ふて、賑やかな町へと指した。祝ひの時、祭りの時、村々は「こぎん」の綾で織られたのである。⁵³⁾」

さらに明確な例は装身具である。『民藝』第76号⁵⁴⁾には「装身具について⁵⁵⁾」という図版解説文がある。その中で柳はいう。

「日本では近頃はアクセサリーの流行作家まで輩出する始末だが、殆ど全部は洋装好みの婦人を目当ての仕事である上に、その多くが欧米の近作品への追従なのだから、余り自慢にならぬ。しかもその元の外国の作が、近頃は殆ど凡て原始民の装寝具から暗示を受けとつてゐることを、どれだけ知つてゐるのであろうか。⁵⁶⁾」

「人類は原始の時代から現代に至るまで、種々な飾りものを身につけて来たが、時代が遡るほど美しいものがあるのは、他のもろもろの工芸品にも見られる通則で、なぜさうなるかの理由こそ、今の人々に課せられた問題だと思へる。こんな事を一々考へるその事が、美しいものを易々と生めぬ一つの理由なのかも知れぬ。知ることと作ることは必ずしも一致しないことが痛感される。ここに揚げた数種の品は、知つて後にその美しさを得たのでは決してない。吾々は少なくともこの事実を知ることによつて、吾々の足りない点を補ひ得ないものであろうか。それとも、こんなことを知ることが、又吾々の作力を弱めるのであろうか。⁵⁷⁾」

この号にはパイワン族(台湾)、アメリカ・インディアン、アイヌ、朝鮮(李朝)などの品が掲載されている。アイヌの品については次のようにいわれている。

52) 「「こぎん」の性質」(『工藝』第14号(昭和7年2月刊)「本号の挿絵」)、全集第11卷所収。同書、P.231。

53) 同書、P.232。

54) 昭和34年4月刊。

55) 全集第11卷所収。

56) 全集第11卷、P.646。

57) 同書、P.654。

「私達が工芸品に現れたアイヌの文化を眺めて、驚嘆するのは、音にそれ等のものに並々ならぬ美しさがあると云ふことだけではない。其のつきぬ味ひに心を惹かれてみると云ふ鑑賞的な意味からではない。それ等のことだけでも感謝に余ることだが、吾々にはもつと大きな驚嘆があるのだ。作物に多少の上下はあらうが、どこにも醜いものがないのだ。拙いものが雑つても、拙いまゝに罪を犯してはゐないのだ。進んだ文化を有つと云ふ私達の作を眺めると、醜いものが圧倒的な数で蔓延つてゐるのだ。之はどう云ふことなのだ。吾々の例では稀有な才を抱く者だけが見事なものを作るのだ。だがアイヌの人はそんな特別な人間を必要としなくても、立派なものが産めるのだ。教養がなくとも設備が整はずとも書物を読まずとも、正しく美しいものを生むだけの力があるのだ。吾々の祖先だつて同じ力量があつたのだ。併し今は何も失つて了つたのだ。美への本能の退化なのか、誤つた教育の結果なのか、……知恵や技巧では勝つことがあつても、肝心の美の本質に來ると、極めて影の淡い存在に過ぎないのだ。だからアイヌの工芸には師として手本として仰ぐ可きものが一つや二つではないのだ。⁵⁸⁾」

（6）手芸の世界

「手芸」とは、『広辞苑』によれば、「主に手先でする技芸」であり、「刺繡・編物・織物・摘細工（つまみざいく）⁵⁹⁾・紹刺（ろざし）⁶⁰⁾・綴錦⁶¹⁾・染物・袋物細工⁶²⁾・ビーズ刺繡・造花・人形細工の類」とされている。また平凡社『世界大百科事典』では、「家庭内で布や糸、針などを用い手作業によって加

58) 「アイヌ人に送る書」(『工藝』第107号(昭和17年3月刊)所載)、全集第15巻「沖繩の傳統」所収。同書、PP.534 - 535。

59) 縮緬や絹の小片をつまんで小さく折りたたみ、台紙などに数多く貼りつけ、また互いに縫い合わせて、花鳥、虫魚などの形を表す。羽子板・髪飾などに施す。

60) 日本刺繡の一。織地の透き目へ金糸・銀糸・色糸を刺し、布地を刺繡で埋める。袋物に用いる。

61) 下絵を経糸の下に置き、下絵の色どり通り絵緯(緯糸として用いる色糸や金銀糸)の杼で縫い取るように織る。帯地・袱紗・壁掛などにされる。

62) 紙入れ・煙草入れ・がま口・手提など、日用の袋状の入れ物の総称。

工、加飾を行い、室内装飾品や衣服などの装飾品を製作することをいう。手わざ、手仕事、手工、手技（伎）、技芸、マニュアル・アート manual art、ハンディクラフト handi craft、ハンディワーク handi work などの呼称がある。」とされた上で、独立工芸（その技術で物の形が加工されるもの）として織物、編物（レース類を含む）、袋物、細工物（皮革、ビーズ、押絵⁶³⁾、つまみ（摘）細工）、造花、人形細工などが挙げられ、付随手芸（作品の一部にその技法を用いるもの）として刺繡（キャンバス・ワーク⁶⁴⁾、ドロン・ワーク⁶⁵⁾、カットワーク⁶⁶⁾、アップリケ⁶⁷⁾、スモッキング⁶⁸⁾、キルティング⁶⁹⁾などを含む）、染色などが挙げられている。

今日、手芸は趣味としてなお盛んである。書店には各種のテキストが並び、街には「〇〇教室」、「〇〇講座」の看板がしばしば見受けられる。近県大手の某文化センターの広告には、手工芸（手芸）の部に次のようなものが掲げられている。

押し花、パッチワーク、パッチワーク・キルト、ヴィクトリアンキルト、ハワイアンキルト、デンマーク手工芸ダネラ、手編み、ニット・カフェ、ボビンレース、クンストレース、ヨーロッパ刺繡、モラと刺繡、創作ビーズ織り、バラエティー手芸、ちりめん手芸、真多呂人形（木目込み創作）、木目込み人形、

63) 花鳥・人物などの形を厚紙で製し、これを美しい布でくみ、中に綿をつめて高低をつけ、板などに貼りつける。

64) canvas work 粗い平織の手芸用布（キャンバス）の織糸にそって刺繡する。

65) drawn work 糸抜き細工、透かしかがり。ドロン・スレッド・ワーク drawn thread workの略称。土台布の織糸を、たとえば経糸を任意の幅に引き抜けばその部分は緯糸が残るので、その緯糸に別糸でかがりをしてレース状にする。

66) cutwork 切抜刺繡。土台の布に、図柄の輪郭線を細かいボタンホール・ステッチでかがり、模様の内側の地布の部分を切り抜いて、透し模様や浮彫効果を出す。寝具や室内装飾品、ブラウス、ワンピースなどの襟、袖、裾などに用いる。

67) applique 地布の上に装飾として、模様に切り抜いた布、革などを縫い付け、または貼りつける。

68) smocking 薄地の布を縫い縮めてひだを寄せ、そのひだ山をすくいながら幾何学模様などを伸縮するようにかがる。ブラウスや子ども服の装飾などに用いる。

69) quilting 防寒または装飾のため、二枚の布の間に芯・綿・毛糸などを入れて刺し縫う。蒲団・部屋着・防寒服などに用いる。

創作押絵、創作人形（紙粘土）、伝統和紙人形、ステンドグラス、シルバーアクセサリー、アートクレイシルバー銀粘土、アメリカンシャドーボックス、デコパージュ、水引、マーレングラスリッツェン（手彫りガラス工芸）、ヨーロッパアンポーセリンアート、和陶、芋版クラフト、手描き友禅、エッグアート、ツール&デコラティブペインティング、レザークラフト、籐・かずらのバッグ&アート、ビーズジュエリー、アンティークスワロフスキービーズアクセサリー、和紙ちぎり絵、古裂の手しごと、布絵、ビーズステッチ、手織り、フェイクストーンアクセサリー、粘土の花（パンフラワー）、陶磁器の上絵付（ヨーロッパチャイナペインティング）、ファブリックステンシル（洋服に型染め）、革びいどろ、ハワイアンリボンレイ、フレンチクラフトカルトナージュ、ペーパーレースパーチメントクラフト

まことに多彩である。もちろんこれらは個人で楽しむためのものであり、通常の民芸に見られるような、使い手（需要・消費）と作り手（供給・生産）の関係は成り立ちにくい。しかし手作りを基本とすること、だれでもが作り手となりうることに於いて、民芸と共通するところは大きい。従来の民芸論ではその手芸的側面がとり上げられることはほとんどなかったが、これからのひとつの視点として、手芸に着目することにより、民芸論の裾野をひろげることができよう。